

【会報 56 号 p 13 「寄稿」】 ●差し替え (2020 年 7 月 10 日)

同窓会報第 56 号 13 頁に掲載された寄稿「同期会の定例化を」(小久保和孝)について、一部間違いがありましたので、お詫びして訂正します。

2 段落目 17 行目の「南北先生」は「南北戦争」の、同 22 行目の「出張」は「主張」の誤りでした。また、5 段落目は全体を削除、2 段落目の 1 行目を修正します。修正後の原稿を添付します。

■寄稿

同期会の定例化を

～学科・教室の集いは札幌農学同窓会の源泉～

小久保和孝

クラーク先生の札幌農学校でのモットーであるビー・ゼントルマン (Be! Gentleman) はビー・アンビシャス (Be! Ambitious) の陰にすっかり霞んでしまった。ビー・ゼントルマンの神髄はnoblesse oblige (noblesse oblige) である。

一八六〇年の米国総人口は記録によるとわずか三千百万人の中で、三百二十六万人余が銃を持って互いに戦い、双方で合計六十二万人余が戦死したアメリカ南北戦争

(American Civil War) で、アマースト・カレッジの教授でありながら、教授職を辞して、義勇軍を率いて戦い、そして苦戦に遭いつつも生き残ったクラーク先生の真骨頂は“市民たれ” (Be! Citizen) である。事実、先生は陸軍に残って欲しいと准将 (Brigadier general) に推薦されたが、これを辞して“市民として生きることを願って”南北戦争は続いていたが、除隊している。従って、よく口にされる「クラーク精神」とはシティズンシップ (citizenship: 市民権) の主張であり、その実践であろう。勿論、この実践のなかにシビル・リーダーシップ (civil-leadership: 市民のリーダーシップ) を含むのは当然である、

彼、クラーク先生・市民戦争の英雄も、北海道を去りマサチューセッツ農科大学学長を退いてからの生涯は、「洋上大学」の創設をめざして、資金を得るための事業の失敗と挫折の連続で終わったが、その信条は「noblesse oblige」であったと、私は信じている。この「言葉」はフランス由来で“高貴な身分には義務が伴う”という貴族社会に生まれたが、一九世紀を通じ英国保守党政権下につくられた幾多の労働立法や社会立法などは、この義務感に基づくものとされている。

現代の代議員制マス・デモクラシー (mass democracy) の制度下では国会議員はもとより、どの分野、組織においても“有るべきリーダーシップ (Leadership)” が求められる。当然にその社会、組織の中で生み出され、そしてその担い手に期待される必須の要素はnoblesse oblige である。このことは古くから指導者の資質問題として人びとの関心が集中されて来た。

そして、二十世紀の大衆社会の出現で、リーダーシップを担ってきたエリートが、エリート (elite) 対マス (mass) という新しい問題を産み出すに到った。それは、少数のエリートによる大衆の従属化が進み、エリートによる権力の集中が行われるようになったことである。

こうした傾向は、現代すべての国・社会・組織で、避けがたい解決すべき課題になるに到った。ここでクラーク精神の視座“市民たれ”は、この課題に立ち向かうのに有効な武器となるであろう。従って、クラーク精神を受け継ぐ我が大学卒業生は、学部であれ大学院であれ、好むと好まざるに拘わらず、組織・社会の中では今日的リーダーシップが求められる。

しかし一方、大学が大衆化した現在の卒業生は基本的にはマス、つまり「大衆」の一員に過ぎない。つまり我々の存在は、エリート階層の最下部を構成する一面とともに、マスの一員でもある両面を持っている。「大衆」とは特定の組織化された人々の集団ではなく、バラバラに切り離された無名の無数の人々のことである。

だが我々卒業生は匿名性の陰に隠れた全くバラバラの個人であろうか？ 我々は札幌農学校を引き継ぐ「農学部卒業生」としての年令・世代を超えた絆があり、「同期会」は堅い絆で結ばれていると、私は信じている。従って、この縦・横の絆が機能すれば、我々個々人は単なるパワー・エリートの“走り使い”ではなく、“操作の客体”ではなく一般市民の一人ではなくなるであろう。我が「農学同窓会」は匿名性を持ったバラバラの“大衆”を“市民”として結集させる組織体である。

最近、我が札幌農学同窓会は「同窓会の“原点”を復活」することが出来た。これは「新たに同窓会の理念を創造」し、未来の同窓会のあるべき姿を作り出す条件が生まれたことを意味している。そこで、当然のこととして、同窓会という車の両輪、つまり横の絆「学年同期会の絆」と、縦の絆「学科・教室などの集い」を活性化することが、さし迫った課題である。これには、先ず一人がその気になれば可能であり、三人も結集すれば全く実現の可能性は豊かなものになるはずである（但し教室・学科等の集いは、現教職員の先見性を持った創造力豊かなロマンと意欲に満ちた支援が望まれる）。

同窓生の皆さん！ 同窓生の泉をコンコンと尽きせぬ流れにするために、この「令和」二年を出発点としようではありませんか。 満八七歳を前に二〇二〇年一月記。

(農学・昭31卒)